

聖化論の再考

- 共同体の聖化について -

「現代人のユダヤ人化」という本の中で大木英夫は「組織がしばしば人間をサタン化する」、「人間個人の場合は責任主体は特定の有機体（肉体）と結合しています。だから罪責をつくなうためには肉体的痛苦を受けなければなりません。それだけに責任意識は現実化してまいります。ところが組織の体は全然痛苦をもたない体です。痛苦をもたない体とは疑似的な体であり、化物みたいなものです。フィクション（虚構）であります。そしてそのなかに人間が組み入れられると、人間がその現実性を奪われ、フィクシャスになってくるのであります。人間はそういうものをつくり出して社会生活をいとなんでいるわけであります。この組織は、現代におけるサタンの格好の棲処(すみか)となっているのであります。」と語り、組織それ自体が持っている問題点を指摘しています。

ところで、日本のいわゆる「きよめ派」といわれる人々の唱えるホーリネス、聖化は個人に力点が置かれてきたように思います。ケジック聖会の中心的メッセージは「聖書的・实际的・個人的」聖化と言われ、この事を如実に物語っています。従って、ガラテヤ人への手紙4章19節の「あなたがた」は、教会それ自身ではなく、勢い個人に適用される傾向が強かったように思います。少なからず私達の教会と団体はそうでした。勿論、信徒一人一人の中にキリストが形造られる時に、その交わりである教会も結果的にキリストが形造られるという理解は決して間違っていない。しかし、個人の潔めや聖化を大切にする教会をはじめ、教派や団体の中に起ってくる様々の問題を耳にする時、個人の聖化だけを取り扱っているのでは不十分ではないかと思えるのです。もし「組織が現代におけるサタンの格好の棲処となって」、「組織がしばしば人間をサタン化する」とするならば、個人の聖化を考えると同時に、組織としての教会それ自身の聖化を考える必要があるのではないのでしょうか。即ち、聖化を一個人の課題に限定してしまうのではなく、それと同時に、教会やキリスト者の団体という組織の聖化ということを考える必要があるのではないのでしょうか。言い換えれば、聖化を教会論的に見直す

と言う事です。

聖化とは「罪から潔め」られていくことです。個人の聖化が、個人の罪を問題にするように、教会やキリスト者の団体としての組織の聖化を考える場合、当然教会やキリスト者の団体の罪を問題にすることになるでしょう。個人の罪は、理性や知性、感情や意志、そして行為に現れてきます。教会やキリスト者の団体の理性、感情、意志、行為は、会議の議決や承認、話し合いでの決定事項、そしてその結果に従う組織的行為になって現れてくるのではないのでしょうか。とすれば、それは会議や話し合いを「問う」ことであり、「手続きのあり方」「議事へのかかわり方」「議決や承認の内容」そして、その「議決や承認の結果に対して組織としての対応」に対する、認罪と悔い改め、キリストへの信仰を問う事になるでしょう。その結果、教会やキリスト者の団体における罪責告白、宣言、声明の採択、種々の議決及び承認、その決定に誠実に応答することによって、責任を果そうとする、議決後の教会やキリスト者の団体の姿勢や行為の変革が起こってくるのではないのでしょうか。そして、これらの事を通して、教会やキリスト者の団体の中に、キリストが形造られていくのではないのでしょうか。

以上